

中國人の美意識を探る

——梅花粧と梅花落のうた——

岩 城 秀 夫

（本稿は、岩城秀夫先生の佛教大學における最終講義（平成八年一月二十七日）を録音テープより起こし、先生自らがこれに若干の加筆補訂を施されたものです。編集委員会注）

只今は大層ご鄭重な紹介をしていただきまして、恐縮に存じます。またこうした最終講義の場を設けて下さいましたことを、大へん光榮に存じております。

本日は随分遠いところ、東は東京・千葉、西は鳥取・廣島・山口・佐賀、そのようなところからお越し下さった方がいらっしやいまして、關心をもつていただいたことを、大そう喜んでおります。

最終講義ということでは、實はわたくし、山口大學を定年退官する時にも一度いたしておりました、最終講義というものは一回かぎりのものだろうと思つていましたら二回目になりました（笑）。

山口大學の時には、「夢と芝居と人生と、」という三つの柱、それがいかに絡まっているかということを、明の劇作家、あるいは隨筆家、評論家といった人たちの見解をもとにお話をいたしました。その内容につきましては、先年創文社から出版いたしました『中國人の美意識』という書物の

中に、その後の新しい資料も加えまして、収めました。今回はその續きをお話するのも一法かと思いましたが、佛教大學に寄せていただきましてから、とくに關心を深めましたのが、中國人の美意識でございますので、ほぼここ九年間ということになりますが、その間に、大學の講義や四條センターの漢詩講座などのほか、諸方面の文獻を披閲している際に得ました資料をもとに、本日は、「中國人の美意識を探る」という題でお話をさせていただきますことにいたしました。別に副題を、「梅花粧と梅花落のうた」とつけました。梅花粧というのは、後ほどお話しますが、お化粧の一つのかたちであります。それから、梅花落というのは、詩の題でございます。わたくしは講義の中で、時どき冗談を申したことがございますので、これまでに講義を聴かれたことのある方の中には、最終講義になっても、まだ話にオチをつけるのか、と思われた方があるかもしれません（笑）、これは詩の題名でございます、これが落ちますと題になりますので（笑）、その點、ちよつとお含みおきいただきたいと存じます。

ところで、中國で梅の花が、一體いつ頃から關心をもたれるようになったのか、詩に詠まれるようになったか、その花はどのような梅の花であったか、どういう姿であったのか、そのようなことを中心に、今日はお話をいたしたいと思います。

プリントをお配りいたしました、まず最初の資料から訓讀いたします。

宋書に曰く、武帝の女の壽陽公主 人日に含章の簷下に臥す。梅花 公主の額に落ちて五出の華を成す。これを拂えども去らず。皇后これを留めしむ。自後、梅花粧有り。後人多くこれに效う、と。

最初にみえます『宋書』というのは、六朝、すなわち南北朝時代の宋の王朝の歴史を書いた書物でありまして、唐の次の宋の歴史を書いたのとはちがいます。

また、この場合の記述は中國の標準的な歴史であります正史の『宋書』とも違うのでありまして、注をしておきましたように、類書の『太平御覽』卷九七〇に引かれているところであります。もとの書物は亡んでおります。

それで、この文章の意味を申しますと、宋という王朝の武帝という天子のお嬢さんの壽陽公主、公主というのは、日本で申しますと内親王に当たりますが、その人が人日、つまり一月七日に含章、含章というのは御殿の名前です。その含章殿の軒下、縁側と考えてもよろしいでしょうが、そこで晝寝をしていたのかもしれませんが、横になつていましたところ、その公主の額の上に梅の花びらが散りかかりまして、五出の華、つまり五瓣の花の形を成した、というのであります。梅の花は元來五瓣ですが、額に梅の花がくつついて、これを拂いのけようとしても、取れなかつた、というのであります。

次に「皇后がこれを留めしむ」とありますが、ここでは皇后と公主の間でちよつとした會話があったと考えてよいでしょう。

額の上の花びらを拂いのけようとしても、とれないので、公主が、京言葉で申しますと、「いややわあ、これ、とれしませんの」とでもつぶやいたとしますと、皇后が、「あんた、それ恰好よろしよおすえ。そのままにしとおきやすな」とでもいったとみてよろしいかと思ひます（笑）。

それで、公主が額の梅の花びらを、そのままにしていまして、宮廷の女官たちの間で、その眞似をするものが次々に出てまいりまして、梅花粧、つまり梅の花を額につける新しい化粧が、大そう流行した、というのであります。

武帝というのは、南朝の宋の第一代の天子でありまして、宋のあと、齊・梁・陳と時代が下ります。宋の時代は四二〇年から四七九年まででありましたが、武帝、正式にはその名を劉裕という人物は、在位期間が非常に短くて、四二〇年六月に即位し、四二二年五月に崩御するまで、僅か二年の間の天子でありました。

でありますから、この文章で宋の武帝といい、壽陽公主といっておりますところから考えますと、梅の花が公主の額に落ちましたのは、永初二年（四二一）からその翌年の永初三年の春のことということになりました。梅化粧の流行はこれ以後ということになります。

その頃の梅花粧の様子を眼で確かめる資料は現在伝わってはいませんが、窺わせる資料がすこし後の時代になって出て来ております。

一つは、臺北の國立故宮博物院所蔵の女性の肖像であります。五代の人の繪ということになっておりまして、女性が右手に手鏡をもち、これを窺き込むようにして、お化粧をしている様子が描かれています。その額の眉間に、ちょうど人指し指の先のあたっているところに、梅の花の模様がみられます。（圖1）



圖 1
浣月図に見られる梅花粧
（國立故宮博物院藏・部分模写）

五代と申しますのは、李白や杜甫で知られる唐の時代のあと、蘇軾や黄庭堅のあらわれる宋になりますまでの間に、五つの王朝が次々と交代した五十年ほどの短い時代を指しているのですが、この繪は、その頃の女性の肖像ということになっています。はつきりと白梅であることがわかるように描かれております。

このように額に飾りをつける風は、五代より前の唐の時代にも、すでに出土文物の中にみられるのでありまして、唐の長安、今の西安市の中堡村から出土しました唐三彩の女性の俑、あるいは大和文華館蔵のそれに、額のところに、梅の花かどうかは定めがたいのですが、何か文様の描かれているのがあります。そしてさらに下の方の口もとの端の方に、一般に鑿鈿えんでんとよばれている「つけえくぼ」らしいものがみられます。何で作ってあったのかは、わかりませんが、黒い圓い形のものをつけていたようであります。

それからその鑿鈿の外側の頬のあたりに、梅の花の文様ではないか、と思われるものがつけられています。これは色が白いようですが、別に御飯粒をくつつけているわけではございません（笑）。（圖2）



圖 2

唐三彩立女俑の梅花粧
(大和文華館蔵より部分模写)

なお、西方のシルクロードに關する調査報告によりますと、天山山脈の東部の南麓、トルファン地方から出土した、七世紀から八世紀にかけての頃の胡服の女子俑、あるいは女性像のみられる殘絹には、顔面に紅い花や鳥のような形の文様を配したのがみられます。あるいはなにか關係があるのかもしれませんが、明確ではありません。今後の課題であります。

次に注意したいのは、皆さんがよくご存知のわが正倉院に藏されている鳥毛立女屏風樹下美人圖であります。これは特別展觀の際には、展示されることもある屏風であります、その中にこういう唐の時代を思わせるような豐滿な女性像が描かれていまして、その中の女性には、やはり額のところになちよつとした文様がみられます。(圖3)



圖 3

鳥毛立女屏風の梅花粧
(正倉院藏より部分模写)

それが梅花粧とどの程度關わりをもつか、明確ではありませんが、口もとにも小さな文様がみられるのもあります。特別展覽のほかに、圖鑑の類でも見られますので、注意していただきたいと存じます。

このように見て來ますと、それでは梅花粧はいつ頃まで續いたのかを知りたくなります。そこで文献の方を調べることにいたしました。

唐・五代を経て北宋になりますが、その末年に徽宗という天子がおりました。すぐれた藝術家でもあり、道樂者でもあつて、終には國を滅ぼしてしまつたような天子でありましたが、この人が作りました宮詞、宮詞というのは、宮中の物事を詠じた詩を申しますが、その中に、次のような作がみられます。

宮人思學壽陽粧

宮人學ばんことを思ふ壽陽粧

每看庭梅次第芳

毎に庭梅の次第に芳さくを看るに

淺拂胭脂輕傳粉

淺く胭脂を拂い輕く粉を傳く

彎彎纖細黛眉長

彎彎として纖細に黛の眉長し

壽陽粧というのは、さきに申しましたように、壽陽公主の額に、梅の花が貼りついたことから始まる、お化粧のことでありますが、庭の梅が咲くのを見るたびに、宮女は梅の花を額に貼りつけて、公主の眞似をしようとする、というのがありまして、淺く胭脂（べに）をひき、輕く白粉をつけ、細く圓みをもたせて黛を長く引くと詠じております。これによつて、徽宗の宮廷で、梅花粧が盛んに行われていたことが推測できるわけであります。

それでは、このように、女性が花びらを額に貼りつけるようなお化粧は、一體、どのようにして行われていたのかと申しますと、どうやら次のようにしたらしいのであります。

薄い金屬片を、梅ならば、梅の花の形に截りまして、その裏側に、膠質、つまりゼラチン質の液を塗つておいて、それに息を吹きかけて、額に押しつけます。すると、體溫と相俟つて、その金屬の薄片が額に貼りつくというわけです。これを花鈿と申します。

ところで、さきほどの宋の徽宗について申しますと、この天子が描いたと伝えられる、「搗練圖」という絹本着色の作品がボストン美術館に蔵されております。

これは唐の宮廷畫家であつた張萱ちやうけんの「搗練圖とうれんず」、すなわち宮女たちが練ねりぎぬを搗いたり、縫ったり、また火熨斗ひのし（ひのし）をかけたたりしているさまを描いた作を、徽宗が模寫したものとされています。三七・〇糲×一四五・三糲の卷子装であります。

もつとも、張萱の原本ではなくて、徽宗の模本ということになつてはおりますが、そこに描かれている宮廷の女性には、額に花鈿をつけているのが認められます。

描かれている場面については、當然その方面の専門家の研究に俟たねばなりませんが、本來田舎娘のする仕事である搗練を、華美で贅澤な衣裝を身にまとつた宮廷の女性が行っているのは、宮蠶、つまり皇后が毎年春に行なう宮中の象徴的な行事として、蠶を育てるところから、絹糸をとって、絹布を衣服に仕立てるまでの生産過程を、宮廷の仕女たちに教える儀式があつたようでありまして、この繪畫はそうした行事を描いたものと思われるのでありますが、果たしてそうであるとしたと、そうした行事は古くからあり、したがって唐の張萱の原本にすでに、花鈿をつけて着飾つた女性が描かれていたと考えられます。

壽陽公主に始まる梅花粧は、おそらく白梅が主であつたろうと思います。

このほか、臺北の故宮博物院には、「唐人宮樂圖」という繪畫がありまして、額に赤い花か何かの文様をつけて、美しく化粧した宮女が描かれています。この圖の製作年代は、最近の研究では、唐末から五代にかけての頃の作であろうとされています。

花鈿に關しましては、唐の白居易、あざなは樂天の「長恨歌」と題する長篇の詩がありますが、この中にもみられます。この詩は唐の玄宗皇帝と楊貴妃との戀愛を詠じた敘事詩ですが、その中

で、楊貴妃が亡くなって後は、誰も見向きもなくなった、というところに、

花鈿 地に委して人の收むるなし

翠翹 金雀 玉搔頭

と詠まれております。

花鈿が地に捨てられて誰も拾おうともしない。それから翠翹、これは翡翠でつくられた髪飾りでしょうか。金雀は雀の形の飾のついた金の簪、それから玉搔頭、これは玉で作られた簪の類でしょう。

この個所についての一般の解釋では、花鈿も翠翹も金雀も玉搔頭も、すべて髪飾りであるという風に認識されているのでありますが、これまでお話いたしましたところから考えますと、花鈿というのは、楊貴妃の額につけられていた化粧のための装飾類ではなかったか、と思われるのであります。

女性の顔を見ます時は、まず眼とか鼻とか、口もととかの様子を見るわけでした、それから髪の方へ視線を移すのが一般ではないでしょうか。先に髪を見てから、そのあとに眼や鼻、あるいは口もとを見ることは、おそらく一般的ではないでしょう。

そうした點から考えますと、白居易もやはり楊貴妃の顔につけられていた花鈿をまずは取りあげ、それが地面に落ちていても、誰も見向きもしない、そしてその次に、翠翹とか金雀とか、玉搔頭とかいった簪の類も落ちていた、という風に詠んだ、と解釋するのがいいのではないのでしょうか。

壽陽公主以來の梅花粧というのは、大體こういう形で、時代を下つて來たと思います。

そこで、次に詩文の方では梅の花はどのように詠まれて來たか、いつ頃から注目されて來たかについて、お話をしたいと思います。

中國の詩の中で、最も古い歌謠を集めたものに、『詩經』があります。孔子が編集したとされているのですが、作者はすべて不明であります。その中に「標有梅」という題の詩がありまして、三章から成っておりますが、その第一章には、

標おちて梅有り

其の實は七つ

我を求むる庶おのこ士よ

その吉よきに迨およべ

とうたわれています。

この詩の意味は、梅の木の枝に實が七つ、まだ落ちないで残っているよ。わたしを求めている未婚の男たちよ。早く求婚しなさいよ、と男性に呼びかけているのであります。

そして第三章では、

標おちて梅有り

其の實は三つ

我を求むる庶士よ

その今に迫へ

となつています。實の数が七つから三つに減つていたのでありまして、今のうちに早く申し込まないと、間に合いませんよ、という風に歌つております（笑）。

ここで注意しなければならぬのは、梅とはいつても、花については全く詠まれていないで、實のみが詠まれていることであります。

これはどう考えればよろしいのか。當時、梅の實について人はどのようにみていたのでしょうか。

そもそも「標有梅」は周王朝の創業期の歌謠と考えられています。文王姫昌のはじめの都であった渭水の北岸、岐山の南の地方の歌謠とみられていまして、正確にはわかりませんが、大雑把に申しまして、紀元前の十一世紀から紀元前の八世紀頃までの間の作であろうとみられております。

いずれのちにも申しますが、黃河流域、とくにその上流地方では、梅の樹は育ちにくかったようでありまして、『詩經』の中で梅の字がみられるのは、この一例のみであります。

このあと、時代が下がつて参りまして、紀元前の五世紀から四世紀頃になりますと、長江のあたりに楚という國がありました。今の湖北省と湖南省あたりと考えていただいたらよろしいのですが、そこに屈原という詩人が現れまして、その弟子たちとともに作った詩篇が、『楚辭』という書物にまとめられて、今に傳わつておりますが、その中に梅は全く詠まれていません。

これは奇妙に思えるのでして、楚は南方の長江流域の地方ですから、北方の黃河流域とはちがつて、梅の樹も多く、おそらく花もよく咲いていたのではないか、と思うのですが、梅の花は詠まれていません。

それでは、一體、その頃の人は梅に對してどういう感觸を持っていたのか、ということを考えてみたいと思います。

大そう逸話めいたことではありませんが、『三國演義』の中で有名な魏の曹操という人がいました。人物評はさまざまで、非常に悪い奴だ、という人もあり、そうでない、という人もありますが、なかなかの策略家であつたことも事實であります。

これは六朝の宋の劉義慶の著した『世說新語』の「假譎篇」にみえる曹操の話であります。行軍をしている時に、水のあるところに通じる道を失い、將兵たちが喉の渇きを訴えました。この時、曹操は、前方に大きな梅林がある。實がいっぱい生っているぞ、と申しました。これを聞くと兵士たちは、みな口の中から唾を出し、その勢に乗って進み、やっと水源にたどりついた、ということです。

正史の『三國志』の曹操の傳にはこうしたことは、書かれていませんので、おそらく曹操が兵士を上手に欺して操つた、という逸話にすぎないのかもしれませんが、ここでわかりますのは、當時一般に梅の實の甘酸っぱいことを知られていた、ということでもあります。

次に、夏殷周あたりの歴史的な傳承といったものを書きとめた『尚書』という書物があります。その中には、現在、われわれも使用する、鹽梅ということばが出て参ります。『尚書』は大體北方を基盤にして作られた書物でありますから、北方に梅の樹があつたのではないか、と考えたくなるのでありますが、どうやら、鹽と梅、つまり鹽からい味と酸っぱい味、そういう味をつける調理の具として、梅の實が南方から北方へ運ばれていたらしいのであります。

日本語では、烏梅と書いて「うめ」と讀んでもいますが、烏という字と梅という字、つまり烏梅の二字が、唐の歴史を書いた『新唐書』卷四〇の「地理志」の江陵府江陵郡（今の湖北省江陵市）

の條に、土貢、つまり地方から朝廷への獻上物の中に、擧げられています。

烏梅は、日本では燻べ梅、梅の燻製という意味に使われ、風邪か咳の薬として知られていますけれども、それが中國で唐の時代に、江陵縣から朝廷に獻上していたということは、烏梅が江陵あたりの特産産物であつたと考えてよろしいかと思ひます。

おそらく北方では調味料として使用されていたのであらうと思ひます。時代は下りますが、宋の蘇軾の「子由の岐下の詩に次韻す」と題する詩の第十二首に、杏を詠じまして「關中 幸いに梅無し、汝彊いて鼎和に充つ」といつているのでありまして、關中では梅が手に入らないから、杏よ、お前さんを代わりに料理に使うのだ、といつているのであります。なお、この詩の自注に、「關中の地 梅を生ぜず」と記しておりますから、いつそうはつきります。

また、蘇軾は長安で梅の樹を見つけたことがありますが、「中隱堂」と題する詩の中で、「二月梅の晩きに驚く 幽香 此の地無し」とも詠じています。關中では梅が皆無というわけではなかつたかもしれませんが、極めて稀であつたのでしょう。見る機會が大そう乏しく、また偶然見つけても、香氣がなかつたということでしょう。

以上、要しますに、北方で梅の花の美しさを觀賞することは、ほとんどなかつたと考えられます。

とすれば、北方では一體何の花を鑑賞していたのだろうか、ということになりますが、先ほど「標有梅」の詩を引きましたのと同じ『詩經』の中に、「桃夭」という歌謠があります。

桃の夭夭たる

灼灼たり 其の華

之の子 于き歸ぐ

其の家室に宜しからん

これは、嫁いでゆく乙女の美しさを詠んだ詩でありまして、桃の花に喩えているのであります。桃の花のように美しい娘さんよ。お前さんがお嫁に行ったら、その嫁ぎ先では大そう喜ばれて、いい家庭を築くであろう、という風なことを考えて、詠んだ歌であります。

桃の天天たる

灼灼たり 其の華

というのは、桃の花が非常に美しいということを歌っているわけですが、桃の花というのは、娘さんに喩えられやすかったのでありまして、日本でも萬葉の歌人大伴家持の歌に、

春の苑 紅匂う桃の花

下照る道に出で立つ乙女

というのがあります。桃の花に對しては、いずれにも美意識が共通しているといえましょう。

こうした例からみますと、中國の古い時代には、北方では桃の花を美しいと見ていましたけれども、梅の花を眼にする機會のほとんど無いままに、關心をもつこともなかったのではないでしょう

か。

ここで、梅花粧の方に眼を向けてみたいと思います。
時代は唐まで下りますが、牛嶠という人に「紅薔薇」と題する詩があります。

曉啼珠露渾無力 曉に啼く珠露 渾べて力無し

繡簇羅襦不著行 繡は羅襦に簇^{むら}りて著けて行かず

若綴壽陽公主額 若し壽陽公主の額に綴られなば

六宮爭肯學梅妝 六宮^い争で肯えて梅妝を學ばん

初めの「曉啼珠露」と申しますのは、紅の薔薇の花の上に、朝露のおいているさまを、美女に通わせて表現したものと思います。朝露は珠のように美しいのだけれども、花がなやかで力なしといった風情であり、刺繡をいちめんに施した羅の肌着を着ているようにみえるけれども、歩くというかもしれない。しかしこの花はなんとも美しい。

そのような紅薔薇に向かつて、詩人牛嶠は、もしもお前さんが壽陽公主の額の上に、貼りついたとしたら、六宮、すなわち天子の後宮の女性たちは、梅の花びらなんかでなくて、紅い薔薇の花びらを額につけるお化粧を喜んだにちがいない。彼女たちはどうして梅の花を額につけることを真似したろうか、というのであります。

これによりますと、牛嶠は梅の花よりも、紅い薔薇の方を、はるかに美しいとみていたことが知られますが、その詠じ方から考えますと、牛嶠の頃の唐の時代にも梅花粧が盛んに行われていたこ

とが、逆に推測できます。

牛嶠は隴西の人で、自ら宰相牛僧孺の孫といていたそうで、僖宗の乾符五年（八七八）に進士に登第しています。晩唐の人であります。

その後、梅花粧がいつごろまで續いていたかは、必ずしも明らかではありませんが、元の時代の芝居、それを雜劇と申しますが、これに登場する俳優が花鈿をつけていたと考えられる資料があります。

それは馬致遠の書いた「漢宮秋」という芝居でありまして、時代は漢、元帝のとき、後宮にいた王昭君という女性が主人公であります。彼女は公主、つまり内親王だということにして、匈奴へお嫁にやられたのですが、その芝居の中に、王昭君の美貌をうたった「醉中天」という歌がありまして、「額角に香鈿翠花を貼り」とお化粧した様子を詠じております。「貼」という字が使用されておりまして、これは明らかに花鈿を額に貼りつけた様を寫していると思います。

それが梅の花の形をしていたかどうかは、明らかではありませんが、梅花粧の流れを汲んでいるものであったと考えられます。

ここで、梅花粧のことは暫くおきまして、梅花落についてお話をしたいと思えます。

まずこの歌がいつ頃から歌われはじめたか、という点であります。『樂府詩集』卷二四に「横吹曲辭」という部立てがあります。一口にいえば笛に合わせて作られた歌と理解していただいたらよろしいかと思いますが、その中に「漢横吹曲」という分類がありまして、そこに「梅花落」という作品が収められています。ここに「漢」という字が冠せられていることが、のちに申しあげる事柄で重要な意味をもちますので、ご記憶願いたいと存じます。

ところで、書名にある「樂府」というのは一體なにか、ということをご説明しておきたいと思います。これは「府」という字が示しますように、元來は役所の名前でありまして、音楽をあつかう役所という意味であります。

漢代に武帝という大そうすぐれた天子がおりましたが、その武帝が設けた役所でありまして、武帝が大へん音楽好きであつたものですから、各地の民謠を採集して、樂府に留めておくようにしました。當時西域との交通が盛んになつて参りましたので、西域の音楽が中國に流れ込んで來まして、その音楽もここに留めておかれることになりました。

ところで、漢の横吹曲というのは、簡単に申しますと、漢の時代の笛の調べに合わせて作られた曲、というぐらゐに、理解していただいたらよいかと思いますが、「漢横吹曲」という部立てのところに、「梅花落」という類の詩が並んでいるのでありますから、これだけを見ますと、「梅花落」という詩は、漢の時代から存在していたという風に考えたくないのであります。どうもそれはすこしちがうようであります。

なぜなら、この分類の中には漢代の作品は一首もないのであります。

そもそも『樂府詩集』というのは、宋の時代に郭茂倩という人が編集した書物であります。これまでお話して來たところでお氣付きのように、漢の時代には梅の花の美しさを觀賞するような雰圍氣は、まだ醸成されていなかったと思います。

「漢横吹曲」の部には

梅花落は本と笛中の曲なり。案ずるに唐の大角曲にも亦た大單于・小單于・大梅花・小梅花等の曲あり、今其の聲猶お存するものあり。

と記しておりますが、最初に擧げられているのは、宋の鮑照の作でありまして、そのあとにも漢

代の作はみられません。

漢の時代に、梅の花が落ちるさまを詠じた詩、あるいは單に梅の花を詠んだ詩でも、もしあったとしたら、この分類に收められていて然るべきでしょう。しかし、それが全くみられないとしますと、漢代の人は梅の花を美しいとして、詩によむことはなかったといえるのではないのでしょうか。

「漢横吹曲」という部立てが設けてあるのにもかかわらず、實は冒頭に宋の鮑照の作がおかれ、以下、時代は下りまして、漢の作はありません。

鮑照の生まれましたのは、四一四年か、その翌年であろうとされていますが、漢という王朝は紀元前ですから、その間があまりに開き過ぎております。疑念がのこるわけではありますが、まずは鮑照の作品をよむことにいたします。

中庭雜樹多

中庭 雜樹多し

偏爲梅咨嗟

偏えに梅の爲に咨嗟す

問君何獨然

君に問う 何んぞ獨り然ると

念其霜中能作花

念う 其の霜の中に能く花を作しな

露中能作實

露の中に能く實を作す

搖蕩春風媚春日

春風に搖蕩して春日に媚ぶ

念爾零落逐寒風

念う 爾なんじ零落して風を逐うて 飄ひるがえるを

徒有霜華無霜質

徒らに霜華有りて霜質無し

まず、初めに「中庭 雜樹多し、偏えに梅の爲に咨嗟す」とあつて、梅が出てきまして、そのあ

とに、「念う 其の霜の中に能く花を作す」と花がうたわれ、次いで「露の中に能く實を作す」とありまして、實がうたわれております。

次に「念う 爾零落して風を逐うて飄る」といい、「徒らに霜華有りて霜質無し」とあるのも、花が散つて風に舞っている様子を詠じているように思えます。

「霜の中に能く花を作す」というのは、霜を冒して梅が花を開くことを詠じているのでありましようし、「風を逐うて飄る」というのは、花瓣の散るさまの美しさに注目しているのでありましよう。

また「霜華有りて霜質無し」というのは、白梅の白い美しさに注意すると同時に、それが地面に散りしいても、霜の白さを保ちつつ、霜の質、すなわちその冷たさはない、といっているのでありまして、さきに挙げました『詩經』の「桃夭」の詩で、桃の花の美しく咲いているのを、嫁ぎゆく乙女に喩えているようなのは、何か感じ方が違いますし、また「標有梅」の詩で、梅の實がうたわれていますけれども、花には全くふれられていないのとも、ずいぶんちがうと思います。

そこで、漢の時代にこの「梅花落」という詩があったのかどうか、その點が氣になりますが、晉の崔豹の『古今注』という書物に注意したいと思います。

この書物には、「梅花落」、その他、西域から流れ込んだ音楽の曲調について記しているところがあります。いま、その個所を『太平御覽』卷五六七に引かれている『樂志』の記載と比較してみます。

『樂志』は『舊唐書』『經籍志』、『新唐書』『藝文志』のいずれにも、「蘇夔の撰、十卷」と記録されています。上下二段に並べて比較してみます。

古今注（晉崔豹）

（一）橫吹胡樂也。博望公張騫入西域、傳其法於西京。唯得摩訶兜勒一曲。

（二）李延年因胡曲、更進新聲二十八解。乘輿以爲武樂。後漢以給邊將軍。和帝時、萬人將軍得用之。

（三）魏晉以來二十八解不復具存。其世用者、黃鵠・隴頭・出關・入關・出塞・入塞・折楊柳・黃覃子・赤之陽・望行人等十曲。

樂志（太平御覽卷五六七引）

樂志曰、橫吹有雙角。卽胡樂、以從軍也。張博望入西涼、傳其法於西京。初得摩訶兜勒一曲。

李延年因胡曲、更造新聲二十八解。

晉以來、有黃鵠・隴頭・出關・入關・出塞・入塞・折楊柳・落梅花・黃覃子・赤枝楊・望行人十曲。

（一）の橫吹というのは、胡、すなわち塞外民族の笛の音楽の意味でありまして、博望侯であった張騫が、西域に入つて、その法を西京、つまり長安に傳えたというのでありますが、「唯だ摩訶

兜勒一曲を得」たと記しております。摩訶と兜勒を二曲としてゐるテキストもありますが、曲が傳存しておりませんので、参考にはなりません。

次に(二)の李延年ですが、この人物は漢の武帝の時の宮廷のフルのような人であります。崔豹の『古今注』によりますと、その李延年が、「胡曲に因りて更に新聲二十八解を進む」といつてゐるのであります、新しいメロディ二十八解を天子に獻じた、というのであります。解というのは、節とか、章とかいうのと同じような意味であります。

それについて、「乘輿以て武樂と爲す」と記していますが、乘輿はここでは天子を指していますから、武帝がその胡曲を武樂として扱ったのであります、そのあと、後漢では邊將軍に給し、「和帝の時に萬人將軍得てこれを用う」とありますから、邊境において武樂、つまり軍樂として使用したと考えられます。

そして、そのあと、(三)にみられるように、「魏晉以來二十八解 復た俱に存せず」と、もはや傳わらなくなつてしまつたと述べまして、次に、「世に用いられるものを見るに」として、黃鵠・隴頭・出關・入關・出塞・入塞・折楊柳・黃覃子・赤之陽・望行人という十曲が擧げられてゐます。

ところが、下段の『樂志』を見ますと、若干文字の異同がありますが、そのほかに、十曲と稱しながら、折楊柳と黃潭子の間に「落梅花」という曲が擧げられています。すべて十一曲ということになります。

ここで注意すべきことは、唐の時代の『樂志』の中に「落梅花」の名がはじめてみられるのであります、ここに「梅花落」という歌の出現の秘密を探ることができるのではないか、と考えます。

そこで、改めて晉について考えますと、西晉と東晉、そして宋・齊・梁・陳・隋、そのあと唐になるわけですが、西晉は二六五年から三一六年まで、黃河流域の洛陽に都をおいておりまして、東晉は三一七年から四二七年まで、建康、長江流域の今の南京に都しておりました。そして四二〇年から四七九年までが宋の時代になります。

「梅花落」という歌が、最初どういう形で作られたものか、記述したものはありませんが、はじめは曲のみであって、歌詞が加えられるようになったのは、鮑照以後のことではないかと思えます。魏晉の頃にはまだ歌詞はなく、曲のみであったと思います。

次に、『樂府詩集』に引かれている『樂府解題』という書物によりますと、「漢横吹曲二十八解」と記していますが、そのあと、「魏晉以來、十曲を傳うるのみ」とありまして、さらにそのあとに、關山月・洛陽道・長安道・梅花落・紫騮馬・驄馬・雨雪・劉生という八曲ができて、計十八曲になったと述べています。

この『樂府解題』という書物について、郭茂倩は著者を記していませんが、『舊唐書』卷一〇二の劉知幾の傳に、その第二子の劉餗が『樂府古題解』一卷を著したと記していますので、おそらく劉餗の著ではないかと思っております。

ほかに、唐の吳兢に『樂府古題要解』という著書がありまして、これには

胡角なるもの有り。本と以て胡笳の聲に應ず。後漸く之を用う。雙角有り。即ち胡樂なり。

とありまして、その次に

又た出關・入關・出塞・入塞・黃覃子・赤之陽・黃鵠吟・隴頭吟・折楊柳・望行人の十曲有り。

と記しています。ここで注意したいのは、さらに、そのあとに、

皆な其の詞無し。關山月以下の八曲の若きは、後代の加うる所なり。

と述べていることでありまして、これによりますと、「關山月」以下の歌詞は後世に加えられたものということになります。ただ、後代というのみでは、時期を厳密に特定できない恨みはのこります。

しかし、このように見て参りますと、「梅花落」という詩は、白梅に對する關心が高まつた時期に生まれたものであり、すでに申しましたように、宋の武帝のとき、壽陽公主の額に梅の花弁が載つたという、四二一年かその翌年あたり以降のことでありまして、また傳存する「梅花落」の歌詞の最も古いのが、四一四年か、その翌年に生まれた、宋の鮑照の作であることと、時期的には大差がないということになります。

さきに申しましたように、霜の中でも美しく花を開き、春風の中で、搖蕩して 春の日に媚びているようだ、と詠じているのでありますが、注意したいのは、霜の華があつて、霜の質がない、といつておりまして、霜の白い美しさに注目しつつ、その冷たさの無いのを稱賛していることであり

ます。

白色の美に對する注視、しかも冷たさの無いのを佳しとする詩人の梅花への愛情は梁の吳均の詩から看取できると思います。吳均（字叔武，南朝梁）は齊梁間の人でありまして、『樂府詩集』では、鮑照の作の次に、吳均の詩を擧げています。

終冬十二月 冬を終うる 十二月

寒風西北吹 寒風 西北より吹く

獨有梅花落 獨り梅花の落つる有り

飄蕩不依枝 飄蕩して枝に依らず

流連逐霜彩 流連して霜の彩（あや）を逐い

散漫下冰漸 散漫して冰漸（お）に下つ

何當與春日 何か當（いつ）に春日と與（とも）に

共映芙蓉池 共に芙蓉の池に映（は）ゆべし

次に陳では後主の作が擧げられています。

金砌落芳梅 金の砌に芳梅落ち

飄零上鳳臺 飄零として鳳臺に上る

拂妝疑粉散 妝を拂（お）えば粉の散るか（おしろい）と疑い

逐溜似萍開 溜（う）まれるを逐（う）えば萍の開（うきくさ）くに似たり

映日花光動 日に映じて花光動き

迎風香氣來 風を迎えて香氣來たる

佳人早插髻 佳人^{つと}早に髻に插し

試立且徘徊 試みに立ちて且^{しば}らく徘徊す

これは梅の白い花びらが風に舞い、また水面に散れば、浮き草が横の方へ開いて流れてゆくさまを美しいと見たのであります。

『樂府詩集』にはこのほかにも「梅花落」の詩を載せておりますが、いま一首、陳の江總の作を見たいと思います。

胡地少春來 胡地 春の來たること少なく

三年驚落梅 三年 落梅に驚く

偏疑粉蝶散 ^{ひごえ}偏に疑う粉蝶の散ぜるか

乍似雪花開 ^{たちま}乍ち雪花の開くに似たり

可憐香氣歇 憐れむべし 香氣^や歇み

可惜風相催 惜しむべし 風の相催催くを

金鏡且莫韻 ^{どう}金鏡 且^{しば}らく韻する莫かれ

玉笛幸徘徊 玉笛 幸いに徘徊す

粉は「おしろい」の意味ですから、モンシロチョウのような翅の白い蝶を思い描いていただけれ

ば、いいと思います。梅の花が散るのを見て、白い蝶がひらひらと舞う様子に重ねていることに、注意したいのであります。

梅の花が開く、とか、美しい、とかいった題をつけないで、落ちるということばを梅の花のあとにくつつけたところに、美意識を窺うことができるかと思えます。

洛陽に都をおいていた西晉が、内亂とか、外壓とかで、南方の建康、今の南京へ都を遷しましたのが、三一七年で、以後、東晉とよばれる王朝が四二〇年頃まで続きます。そして宋という王朝にとつて代わられるのですが、當時、南方に移住せざるを得なかった貴族の、北方への思慕、回歸の懷い、そうしたものが、南方で見る白梅の散る姿を眼にして、北方で見た雪の美しかったことを想起させたのではないかと思えます。

鮑照の「梅花落」を見ますと、五字句と七字句が混じっています。鮑照以後の作はすべて五字句ばかりですが、もし鮑照の作が胡曲に合わせて作った最初のものである、としますと、胡曲に合わせる爲に、ことさらに五字句と七字句とを混ぜて作詞をしたのかもしれない、とこれは想像の域を出ませんが、推測をしております。

鮑照が生まれましたのは、東晉の初めからすでに百年ばかり経過しております。やむなく南方に移り住むようになった人たちに比べれば、悲哀の情もよほど薄らいでいたのではないかと考えられます。

東晉の書家として有名な王羲之が、山陰の蘭亭に四十餘人の詩人を招き、詩酒の會を催したことは、よく知られていますが、當時すでに南方の貴族と北方から來た貴族との間には、ある程度の融和ができていたとみられていますから、鮑照の頃には、南方の氣候風土や花木の美の方に、より多

くの關心が向けられていた可能性があるかと思えます。

元來の胡曲は、悲愁を帯びた曲であつたかもしれませんが、南朝の宋の頃まで時代が下りますと、梅花の美しさに人が心を惹かれ、梅花粧というお化粧まで流行するようになります、詩人の方もこれに同調するかのようになつたのではないかと考えます。

「梅花粧」と「梅花落」について現在考えておりますことは、以上申し述べたところでございます。

なお、一二付け加えさせていただきますと、皆さんご存知のようにお釋迦さんの額に「ほくろ」のようなものがみられますが、これは白毫と申しまして、實は白髪のが渦を巻いたかたちになっているのだ、と物の本には書かれています。修業ができた人にはこれがあるということになっているようですが、最近氣がつかましたところでは、觀音さんの像に、白毫のついてるのと、ついてないのとがございます。

大津の三井寺、正しくは園城寺の十一面觀音には、白毫がみられませんが、京都東山の泉涌寺の楊貴妃觀音には、白毫がみられます。寺傳によれば、隨分昔にさる和尚さんが中國から持ち歸つたのだそうで、楊貴妃が亡くなつた後、玄宗皇帝が等身大の座像を作らせたのがこれだ、ということになっているようです。

楊貴妃觀音の白毫を、梅花粧と重ね合わせてよいかどうか、簡單には申せませんが、楊貴妃が眉間に花鈿をつけていたであろうことは、さきほど白居易の「長恨歌」を引いて申しました通りでございます。

美人畫の巨匠上村松園さんも、楊貴妃の畫像を製作されたときに、眉間にそれと思われるものを描いておられます。壽陽公主の梅花粧の流れではないかと思つております。

これは餘談になりましたが、本日はここで終わらせていただきます。長時間御静聴下さいましてありがとうございます。